

志摩国国崎（鳥羽市）の津波被災の歴史

東京大学地震研究所* 都司嘉宣

History of Tsunami Damage at Kuzaki Village, Toba City, Mie Prefecture

Yoshinobu TSUJI

Earthquake Research Institute, University of Tokyo

Yayoi 1-1-1, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0032, Japan

(Received January 7, 2000; Accepted February 19, 2000)

Kuzaki, Toba city, Mie Prefecture is a small village and is situated on a rocky marine terrace on the coast of Shima peninsula. In 12th century, a part of the inhabitants of Kuzaki newly constructed Ootsu village on the plain adjoining Kuzaki in the east. In 1498, the tsunami of the Meio earthquake swept away all houses of Ootsu. After the tsunami, the survivors removed to the residential area of Kuzaki, whose ground height is 10 to 25 meters. Since the Meio tsunami, inhabitants of Kuzaki never built houses again on the place of Ootsu. In 1707, a large tsunami of the Hoei earthquake hit the coast, but they were damaged slightly, in contrast to a huge human loss took place in the neighboring villages. In 1854, another huge tsunami, called Ansei-Tokai Earthquake-Tsunami, hit Kuzaki, and the run-up height of the wave was recorded at 22.7 meters, but only 6 persons, 2 percent of the total population, were killed and only 4 houses were swept away. Kuzaki village is admirable in that it is one of the oldest examples of the success in tsunami hazard mitigation by removing whole the village to a heigher place.

Key Words: 1498 Meio Earthquake, Tsunami hazard mitigation, Village removing to a heigher place,

§ 1. はじめに

三重県下の複数地点に被害記録を残した歴史地震のなかで一番古いものは、明応地震(1498)によるものである。多度町下野代の徳蓮寺がこの地震によって倒壊したと伝えられたほか、津波による重大な被害があったことが阿乃津（現在津市）、大湊、伊勢市塩屋、鳥羽市国崎（くざき）、浜島町塩屋等に記録されている。ことに、

本稿で取り上げる国崎では隣接する大津の集落が全流失したと伝えられる大きな被害を生じた。国崎は、宝永地震（1707）、安政東海地震（1854）の津波のさいにもおのおの被災している。ことに、安政東海地震（1854）の津波では、周辺の集落に比較して、ここだけ津波浸水高の数値が 22.7m と飛び抜けて大きな値を示した「特異点」であった（都司ら，1991）。本稿では、この国崎の集落の往古以来の発展と津波被災、および先人たちの行った津波対策について論じてみる。

*〒 113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1

なお、本稿中の古文献名で出所を特に注記しないものは、都司（1981）、「新収日本地震史料、第1巻」（1981）、あるいは「鳥羽市史・上」（1991）のいずれかに紹介されているものである。「倭名抄」などの歴史上の基本文献の解題調査は、「日本史広辞典」（1997）によった。

§ 2. 古代・中世の志摩国国崎の変遷

2. 1 古代の国崎

鳥羽市国崎（くざき）は志摩半島先端部海岸の鰐崎の基部に位置している小集落である。東海沖の海域に面しているため、歴代の東海地震の津波による被災を繰り返してきた。この国崎の古代から中世にかけての変遷について、平松（1983）、「角川日本地名大辞典、24、三重県」（1983、以下「地名辞典」と略す）、「鳥羽市史」（鳥羽市役所、1991、以下「市史」）によって述べてみよう。

国崎の地名は、平安時代の文献にすでに現れる。「神宮雑例集（じんぐうざうれいしゅう）」には、志摩国の神戸（かんべ）は、「伊雑、鶺食、槌柄（たしから）、国崎」の4つの集落の合計六十六戸であると記されている。「神戸」というのは伊勢神宮での祭儀遂行に必要な費用物品を貢納する戸で、平安時代の中期までは、貢納物はいったん租庸調として国家に供出され、それを国司が仲介して伊勢神宮に納める形を取っていたが、平安時代末期には、伊勢神宮が直接各神戸から貢納を納めさせるようになり、伊勢神宮を領主とする荘園と化していたとされる（「市史」）。

承平年間（931-938）に成立した「倭名類聚抄」に「答志神戸郷」として記されたものが国崎のことであるとされており（「地名辞典」）、さらに「延喜大神宮式」、「延喜儀式帳」などに志摩国神戸の記載があることから、国崎の集落が伊勢神宮の神戸となったのは平安時代初期にさかのぼりうると推定される。「延喜」は901年から923年までの年号である。

平安時代後期の天永二年（1111）の「二所太神宮神主注進状」（国崎神戸文書）には「東は海、西は山を限（かぎり）とし、南は奈久佐浜を限りとし、北は一松および輶輶（ろくろ）崎を限りとす」と村域範囲が記され、田は八段二百四十歩と記録されている。さらに、国崎は神戸として伊勢内宮と外宮の二社に、毎年三度の祭礼ごとに、アワビや塩、牡蠣（かき）や鯛を貢納したことが記されている。

以上によって国崎は平安時代を通じて伊勢神宮の神戸として存続し続けたことが結論される。

2. 2 国崎と大津の分離

じつは前節に述べた「神宮雑例集」の原文では国崎については「志摩の国、国崎本ノ神戸」と書かれ「本ノ」の2字が加わっている。また「神風抄（じんぼうしゅう）」には、「志摩国」のなかの集落名として「大津」が「国崎」と並列して列挙されている。「神領給人引付」と「神領目録」などに「大津国崎神戸」、「建久内宮年中行事」に「大津国崎」の表記が現れる。

このような原史料の状況について、「増補国崎神戸誌」（1935）の筆者である酒井錠吉郎は、「大津は建久（1190-1199）以前に於いて国崎と分離せしものならん」と推定している。また、「市史」に引用された郷土史家、井上頼之氏の文によれば、「大津神戸は元来国崎神戸の一部分の名にして、『大神宮本記』、『大同本記』みな国崎のみ挙ぐ。（中略、天永二年（1111）の記事あり、前述）すなわち藤原時代（＝平安時代）までは大津と国崎とは差別は見ざりしなり。然るに『建久年中行事』及び『神風抄』の大津国崎と並記せるを見れば、この間八、九十年の間に於いて分離独立せしものならん。『雑例集』に国崎本神戸とあるを見れば、大津の独立せしに対して、国崎を本神戸と称したること明らかなり」と記している。すなわち、天永二年（1111）以後、建久年間（1190-1199）までの約80年間に、大津が国崎から分離し、新しく分離した

「大津神戸」に対してもとからあった「国崎」を「本神戸」と称したのだというのである。

この分離した「大津神戸」が、鎌倉時代を経て、南北朝時代にまで存続したことは、正中元年（1324）十二月の「二所太神宮神人解案」および「制止状」（「市史」，上巻，p731）に「大津国崎神戸」とあること等から明らかである。

さらに、「鳥羽誌」（明治44年（1911）、曾我部市太編）の宝剣山常福寺の説明文にも「旧時大津国崎の二神戸に分かれし時、此の寺大津に属し天通山と号す。明応七年八月海嘯のため、大津の地流失せしを以て字里谷に移す」とあって、やはり、明応津波以前には、国崎神戸とは別に大津神戸があったことが寺に伝承されていたことが判明する。

以上、平安時代末期12世紀から南北朝時代を経て明応津波（1498）の年まで、国崎から発展分離した大津という別個の神戸集落が存在したことが結論される。

§ 3. 明応津波と国崎・大津

国崎から分離した大津が、明応津波によって重大な被災をしたことは当地の寺院、常福寺の伝承などに伝えられている。すなわち、「増補・国崎神戸誌」によれば、「大津は（中略）明応七年八月津浪の為に荒廃し更に国崎と合併せりとの口碑を存す」と記されている。

さらに、明応津波のとき大津にあった常福寺という寺院について、「増補・国崎神戸誌」には次のように記されている。「いまの常福寺（今曹洞宗）は、元天台宗に属し、大通山海門菴（庵か）とて大津にありしが、明応の震災後今の地（字海間谷）に移せるなり」と記されている。この寺の山号である「大通山」は地名「おおつ」に漢字をあてたものであろうと推定される。（「鳥羽誌」には「天通山」とあるが編集時の誤写であろう）。ところが、津波によって寺ごと流失して、もとの国崎の中の海間谷という場所に移転、再興された。それに伴って山号も「宝剣山」と変更された。

大津にあった月読神社については、「旧月読ノ宮社」（中略）口碑に云。この社は往古大津神戸の氏神として奉祈せしが明応七年八月津浪の災後、大津神戸は移転して国崎神戸に合したるも当社はその境内社稀人神社と共に字大津の田圃の間に残存せしなり」と記されている。すなわち、神社だけは移転せず、田畑地に戻った旧大津の場所にそのまま存在している、というのである。

以上、明応津波（1498）によって大津神戸の集落が壊滅し、生存者たちは寺とともに国崎に合併移転し、もとの大津の市街地は放棄され田畑地に帰したことが判明する。

§ 4. 近世の国崎

大津の地名は、明応七年（1498）の津波以後ぶつりと史料に現れなくなってしまう。

明応津波の後、16世紀に国崎は尾鷲地方に発した戦国大名である九鬼氏の支配下にはいる。江戸時代の初頭の寛永十年（1633）には、国替えによって鳥羽藩内藤氏の支配下に入る。国崎ではこれらの時期、武家と神宮の双方への貢納を課せられ苦しい時代が続いた。歴代の国崎の庄屋は、この苦境を鳥羽藩、神宮の双方に訴え続けた。ときには、藩への租税あるいは神宮への貢納の軽減措置が取られ、小康することはあっても基本的には明治維新（1868）まで税の重複状態は継続する。さらに江戸時代後半には、北の隣村石鏡村との領分争いや下草薙りの争いがおきた。これらの曲折した国崎の歴史経過を記す数多くの近世史料が残存している（「市史」、および鳥羽市「海の博物館」）。そしてこれらの史料にも大津の地名は全く現れないのである。

すなわち、平安時代末期に国崎から分離し、明応津波（1498）のときまで大津神戸として繁栄をほこった大津の市街地は、その後ついに復興されることなく、人の住まぬ田畑地のまま明治維新を経て現在に至っているのである。

§ 5. 現代地図上にみる国崎と大津旧跡

国崎は平安時代にすでにその存在が記録された約千年の歴史を誇る古い集落である。しかし、昭和 40 年の世帯数は 114 であって、歴史が古いわりにはきわめて小さな沿岸集落である。家屋は岩盤台地上と、その東側の海間谷と呼ばれる狭い谷筋に沿って立地しているため、新たに居住地を増やすことはきわめて困難である。居住地内の道は狭く、急坂ばかりである。海岸沿いの集落であるにもかかわらず、居住地の標高は概して高く、海間谷の最も低い家の敷地で標高約 7 m、常福寺のある岩盤台地の上の居住地の敷地の標高は 20 m から 25 m にも達する。

国崎は古来耕作地の面積が少なく、伊勢神宮への貢納物がアワビ、塩、鯛などの水産物であったことから分かるように、海からの産物の採取を主たる産業とする集落であった。にもかかわらず、居住地の標高が高いということは、日々の生業の不便を忍んで生活してきたことを意味する。

大津の集落は失われて 500 年あまりを経過したが、そのあった場所は、江戸時代の絵図

(「市史」所載)、地元伝承、月読神社の故地、小字名などから現代の地図上にその位置をほぼ推定しうる。国崎の集落を海岸に下り、海岸道路を西に進むと小さな川にかかった「大津橋」に出る。この川にそっては西に向かう小平野が開けている。この小平野が大津の故地である。地図で分かるように現在もこの小平野にはわずかに、二軒の家屋が点在するのみである。

この小平野は現在の国崎漁港をすぐ目の前に見る位置に広がっている。大津の原義は、「大きな港」である。国崎漁港は鏝岬の背後に位置し、岩礁群によって沖の荒波が防がれ天然の良港をなしている。この港のことを讃えて大津の名を生じたと考えて間違いあるまい。当然、この小平野に居住地をおいた方が漁業を主産業とする生活には有利である。すなわち、この小平野のほうが標高が低く漁港に近く、住居の敷地に供することのできるゆつたりとした土地が得

やすい。さらに、生活水を得やすく、背後地での農業にも便利である。しかるに、国崎の人々は明応地震津波(1498)以来 500 年間余りにもわたって、大津の故地の小平野部に居住家屋を造らなかった。土地の狭い、標高の高い国崎に不便を忍んで住み続けたのである。これはなぜであろうか？

§ 6. 国崎は津波対策のための高地集落移転の例か？

前節の最後の質問の回答は、ここまで読んできた読者にはもう自明であろう。明応津波の被災を体験した大津の人々は、小平野部に居住地を作れば、将来大きな津波が起きれば集落が壊滅してしまう、という教訓を得た。その教訓を人人は 500 年あまりの年月、決して忘れなかった。明応地震津波(1498)の生存者たちは、不便を承知で、高地居住して残った隣の国崎の本神戸の集落に合併し、ぎっしりと家を並べて住み始めた。寺もまた大津の故地をすて、岩の台地の上に移転した。こうして住民たちは、日常の不便と引き替えに、津波からの永遠の安全を得たのだ、と推定される。

明応地震津波から 209 年たった宝永 4 年(1707)十月四日の午後 4 時頃、国崎は宝永地震の津波に襲われた。この津波による被害は、国崎では漁具と漁船、および田畑の被害のみにとどまり、家屋、人身の被害を生じなかった

(「市史」)。これに比べて国崎のすぐ南、阿児町国府の「小林家文書」は国府で潰家 5 ～ 60 軒、半潰家も 5 ～ 60 軒であったと伝え、志摩半島南岸の南島町贅浦では溺死者 60 人

(「最明寺津浪石碑文」)、紀伊長島では溺死者は実に 500 余人と記録されている(「仏光寺津波流死塔」)。

幕末の安政東海地震(1854)の津波では、国崎は「津波の特異点」となり、潮の高さは城山、坂森山を打ち越えて「彦間にて七丈五尺」(22.7 m)であったと、「常福寺津波流失塔」の碑文に記されている。しかるに、その被害は、わず

かに「家四軒、宮二軒」とどまり、溺死者も六名にとどまった。国崎の家数は延享三年（1746）に59、人口は312人であった（「市史」、上巻 p452）。居住地の土地が狭隘なため、江戸期にはほとんど増減がなかったと考えられることから、この数字は安政津波時にも大きな差異はないであろう。してみると、安政東海地震の津波による家の流失は全家屋の7%にとどまり、溺死者はわずかに全人口の2%にとどまったことになる。20m以上という大きな津波浸水高さに比して、非常に小さな被害にとどまった、ということができる。

以上のように、国崎の集落の高地移転は、江戸時代の二大津波に対しても、ともに大きな効果を発揮していたことが判明する。また、江戸時代のこれら2度の津波の経験が、大津の低地へ住居を建ててはいけないという教訓への確信をさらに固めさせたと推定される。

§ 7. 明応津波の浸水高さ

国崎、大津での明応津波の浸水高さの概略値を推定してみよう。地図から分かるように、大津の平野部は決して標高の低い土地ではない。海岸付近は5mほどの段丘状をなしており、大津橋の付近ですでに6m近い標高がある。大津の小平野に、寺、神社の敷地と「大津神戸」として繁栄した集落を容れる広さを想定すると、居住地は標高8m付近まで広がっていたと考えなければなるまい。全村流失の事態を招くためには、地上冠水高さ2m以上が必要と考えられるので、大ざっぱに10m以上の浸水高さがあったものと考えられる。いっぽう、国崎の集落では大部分の家屋が標高10m以上の所にあるが、これは、「これより低い標高の所に家を建てては危険」という先人の知恵を反映しているためであろう。してみると明応津波の国崎・大津での浸水高さは約10mであったということになるであろう。

§ 8. むすび

国崎の近世文書を調べると、この集落は元禄十六年（1703）に火災が起きており、「村中残らず焼失」していることがわかる。狭隘地の密集居住であるためひとたび火災を生じると類焼しやすく、しかも川から遠く消火の水が得にくい。国崎のような集落は火災の危険が大きいことは容易に推測しうる。しかしながら、このような大火災にあつてさえ、国崎の住民は居住地を平野部に移転することを考えなかった。それだけ、津波に対する心構えが、火災よりもきびしく感じられていたことになる。

三陸海岸地方では明治三陸津波（1898）、あるいは昭和三陸津波（1933）のあと、多数の集落が高地移転を実施している。漁業を主体とする日常生活の不便を忍んで現在まで高所居住を堅持している集落もあるが、なかには永年のうちに不便に抗しきれず、あるいは防災意識が希薄化して低所に再移転し、海辺に集落を戻してしまった例もある。

いま、ここに取り上げた志摩国の国崎は、50年も昔に津波対策としての高地移転を実施し、現代まで守り通して、江戸時代には2度の大きな津波にさいしてきわめて有効に災害軽減を達成した。鳥羽市国崎は、高所集落移転の非常に古い成功事例として、津波防災対策の見地から大きな賞賛に値するものである。

§ 9. 謝辞

史料の閲覧とともに、志摩地方の郷土史についてお教えいただいた、三重県立図書館西野儀一郎氏、志摩地方の近世文書をご紹介いただいた鳥羽市海の博物館、鳥羽市国崎の常福寺、および紀伊長島町弘光寺に感謝申し上げます。

文 献

平松令三（編集代表），1983.「三重県の地名」，
 「日本歴史地名大系，24」，平凡社，1081pp.
 角川日本地名大辞典編纂委員会（委員長，竹内
 理三），1983.「角川日本地名大辞典，24，三
 重県」，角川書店，1643pp.
 日本史広辞典編集委員会，1997.「日本史広辞
 典」，山川出版社，2275pp.

鳥羽市役所，1991.「鳥羽市史」，上下2巻，上
 巻 1126pp，下巻 1347pp.
 東京大学地震研究所，1981.「新収，日本地震史
 料，第1巻」，193pp.
 都司嘉宣，1981.「紀伊半島地震津波史料」，防
 災科学技術研究資料.60.国立防災科学技術セ
 ンター. 392pp.
 都司嘉宣，日野貴之，岩崎伸一，矢沼 隆，
 北原系子，1991.安政東海地震津波(1854)の
 浸水高の精密調査，歴史地震，7，43-56.

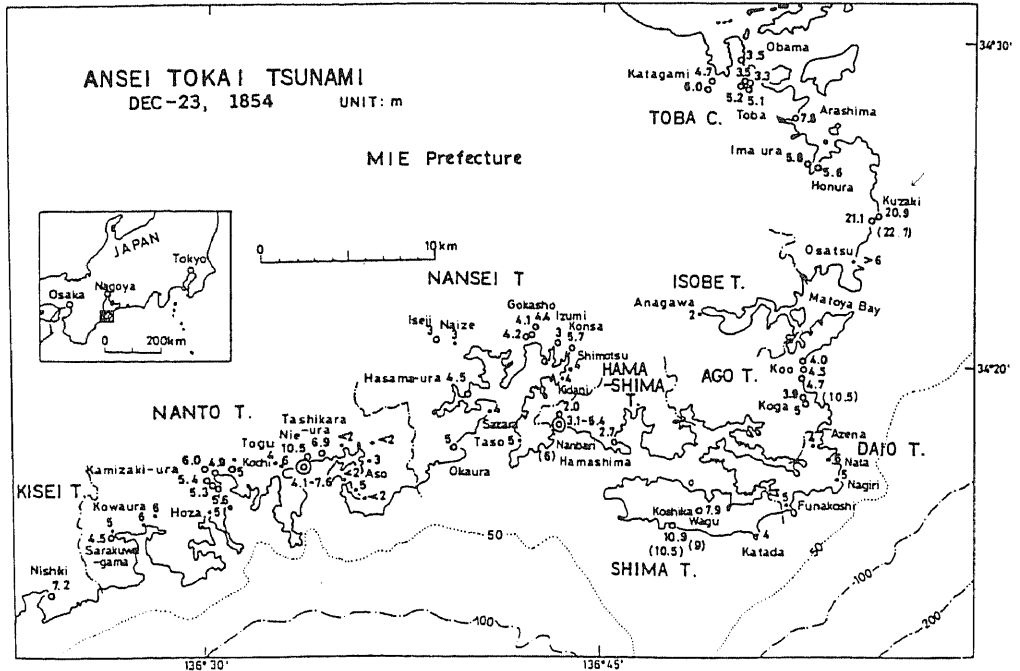


図1. 安政東海地震(1854)の津波浸水高さ(都司ら，1991)。

国崎(矢印)で飛び抜けて大きく，古文書記録によれば七丈五尺(22.7m)に達した
 Fig.1 Heights of the tsunami of the 1854 Ansei-Tokai Earthquake (Tsuji et al. 1991)
 The arrow shows the location of Kuzaki, where tsunami run-up height was 22.7 meters.

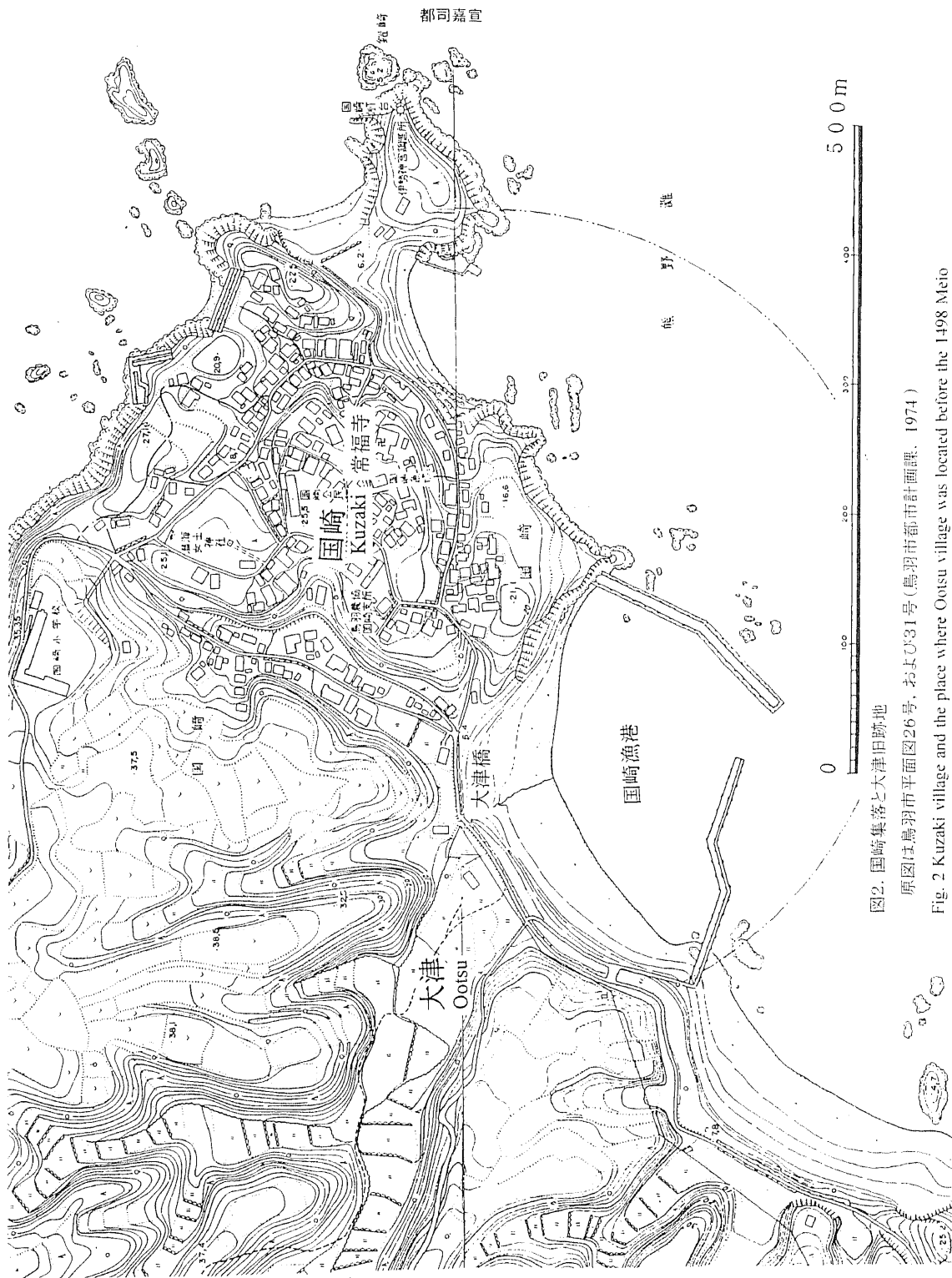


図2. 国崎集落と大津旧跡地

原図は鳥羽市平面図26号、および31号(鳥羽市都市計画課、1974)

Fig. 2 Kuzaki village and the place where Ootsu village was located before the 1498 Meio Earthquake-Tsunami